The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大学院重点化が実現して
Author(s)	柏木, 哲夫
Citation	大阪大学臨床老年行動学年報. 2000, 5, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/6810
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大学院重点化が実現して

柏　木　哲　夫

大阪大学人間科学部も2000年4月に大学院重点化が完成し、学部は大阪大学人間科学部人間行動学講座臨床老年行動学研究分野となり、大学院は大阪大学大学院人間科学研究科人間行動学講座臨床死生学研究分野（なんと漢字が30続く!!）となった。多くの漢字が並び、人を威圧するような感じがするので、私個人としてはあまり好きではないが、要するに“「老いと死」を臨床的に研究、教育する講座”という本来のidentityに変化はない。

大学院重点化に伴い、大学院生の人数も増え、博士課程３年４名、２年２名、１年２名、修士課程２年３名、１年４名、計15名、学部学生４年４名、３年６名、計10名となり、大学院と学部を合わせた学生数は25名の大所帯になった。

私自身は本年４月より、大学の評議員を拝命し、会議が多くなった。そのぶん、学生指導が十分できなくなり、学生さんには申し訳なく思っている。幸い、優秀な学生さんが集まってくれているので、かなり、自主的に研究を進めてくれている。この年報に発表されている論文も、いわゆる「自主研究」の結果である。

人間理解に結びつくものであれば、どんなテーマを選んでもよいというのが私自身の基本姿勢であるが、やはり、「老いと死」の問題に焦点を当てた研究が多くなっている。因に大学院生の研究テーマを羅列してみると、

・要介護高齢者のQOLに関する研究
・Spiritual Careの効果について
・対象喪失、悲嘆について
・高齢者のセルフエフィカシーと時間的展望について
・臓器移植後のストレスと精神的健康に関する実証的研究
・死別経験による成長感に関する研究
・職場復帰をめざす慢性疾患患者のためのサポート
・介護ストレスとWell-being
・ユーモアのストレス緩和効果について
・高齢者の心理的適性に関する実証的研究
・患者のQOLに環境が及ぼす影響について
・高齢者の希望に関する研究
・配偶者喪失への対処（コーピング）に関する研究
・がん末期の治療選択行動に関する研究
・突然の死が遺族に及ぼす影響と回復過程

等となる。この中には共同研究という形で進んでいるものもあり、学生同士が助け合い、知恵を出し合って研究がまとまっていく様を見ていると、人数の多さがプラスに働くように思う。

制度の移行期は学生も教師も大変である。しかし、これが現実であれば、皆が協力して、波を乗り越える以外に途はない。厳しい現実の中ではあるが、二人の助手に助けられなが

ら、今年も研究と教育に励みたいと願っている。

2000年5月

教授室にて